真のランボー像を読み解く人

尾崎寿一郎著『ランボー追跡』に寄せて

鈴木比佐雄

尾崎寿一郎さんは、近代・現代詩の中で本物の詩や詩人を問い続けてきた探求者だ。流布されてきた説に対して一切の予断を抱かずに、オリジナルの詩篇やその時代の詩人の生き方に向き合おうとしてきた信念の人でもある。尾崎さんは一九五九年に戦前・戦中の伝説的な詩人の逸見猶吉の詩と運命的に出会った。そして四十年以上を費やして二〇〇四年に『逸見猶吉 ウルトラマリンの世界』と二〇〇六年『逸見猶吉 火襤褸篇』の二冊の研究書を私家版で刊行した。その二冊の逸見猶吉論は、既刊の研究書を参考にした詩人論ではなく、逸見猶吉が関係する縁の場所を訪ね、関係者からの取材も含めて多くの新たな発見が含まれている。またそれらを踏まえて逸見猶吉の詩篇と生き方の意味するものが、日本の近代・現代の矛盾を背負い、それに抵抗して書かれたものであることを尾崎さんは追跡し解明を試みたのだった。その二冊の原稿用紙八百数十枚もの私家版の論究には、例えば逸見猶吉のペンネームの由来を親族・関係者の資料に分け入り、足尾銅山鉱毒公害の加害者に逸見猶吉の親族が関わっていたことによる痛みを読み取っている。そんな日本の近代化が引き起こした反人間的で反自然的な公害、中国大陸への侵略戦争の最前線であった満州の実相など

を、内部の問題として直視していた逸見猶吉という詩人の内面の深いところにまで下りていって、尾崎さんは詩人と時代の関係を詩篇の中に読み取る批評を行っている。また逸見猶吉の詩行の強靭さに、仏教でいう般若（無分別知）である無意識の深層があることを突き止めていく。そんな逸見猶吉という詩人に最も影響を与えた詩人がフランスの詩人ランボーであると尾崎さんは直観する。そしてある意味で逸見猶吉がランボーのような革命的な詩的精神を実践した詩人であるという仮説を尾崎さんは論証しようとした。逆説的に言うなら時代の危機に立ち向かう詩人はランボー的あり、また逸見猶吉的な存在であるとも語っているのかも知れない。それほど逸見猶吉はスケールが大きい詩人であったにも関わらず、終戦直後満州で三十八歳亡くなったこともあり、過小評価されていることに対して尾崎さんは逸見猶吉の本来的な価値を論究し続けている。今も私家版の逸見猶吉論に手を入れて、新たな発見を加えながら逸見猶吉論を執筆しており、近い将来には刊行を予定しているという。

今回の『ランボー追跡』の特徴は、ランボーの詩篇の中に普仏戦争とパリ・コミューンの影響を具体的に指摘し、さらに想像的に読み取り、ランボーの詩行を生き生きと読み直ししていることだ。パリコミューンなどの歴史的記述には、大佛次郎のノンフィクション『パリ燃ゆ』などの資料を参考にしている。またランボーの詩と散文と手紙は平井啓之・湯浅博雄・中地義和訳

『ランボー全詩集』（青土社、一九九四年刊）及び粟津則雄訳『ランボオ全作品集』（思潮社、一九六五年刊）などを引用し、当時のランボーの歴史的な認識や行動を浮き彫りにしようと試みている。本書は六章に分かれている。第一章「普仏戦争と三度の出奔」では、ベルギーとの国境に近いシャルルヴィル市に生れた十五歳前後のランボーが、第二帝政から第三共和制に移行していくプロシアとフランスの戦争時代に、家出を繰り返し詩友や知人を訪ねたりしながら世界を知っていくことを記している。ランボーは十五歳前後でもラテン語でその見聞した同時代の歴史的な事実を叙事詩に表現できる力をすでに兼ね備えていた。尾崎さんは家出少年が歴史の目撃者であったことを詩行から読み取っていくのだ。フランスが敗北しナポレオン三世は拉致され、プロシアはドイツ諸侯を統一しドイツ帝国となり、祝賀会をヴェルサイユ宮殿で開くほど力を強め、共和主義派とに屈辱的な賠償金とドーデの「最後の授業」で知られているアルザスとロレーヌなどの領土割譲を課した『講和予備協定』を結ばせる。そのような敗北の歴史の中にあって、高踏派的な抒情詩から多くを学びつつ、マラルメ以前の「暗示に満ちた映像と音楽を通して対象を喚起する創作方法」である象徴詩的な詩法を持った若き詩人が、その後にパリ・コミューンを経て革命的な詩人となっていく準備段階を描いている。

第二章「コミューンと見者の手紙」では、ランボーのパリ・コミューンへの関わりを多くの

資料を検討しながら尾崎さんは、ランボーの実像を冷静に浮き彫りにしようとしている。その前提としてランボー研究の重要な本としてランボーの相談相手だったドラエー著『身近な思い出』（メッサン、一九二五年刊）とランボーの伝記であるプチフィス著『アルチュール・ランボー』（筑摩書房、一九八六年刊）の二冊が、第一級の資料である手紙の吟味や検証を経ていないことを明らかにして、推測や想像が先にたち、事実認識の危うさを指摘している。したがってそれらの二冊を参考に書かれた数多のランボー論もそのような危うさを抱えていると尾崎さんは考えている。この箇所から分かることは、尾崎さんがなぜこの書物を書こうとしたかの純粋な動機を明らかにしていることだ。尾崎さんはそのような一切の予断を許さずにランボーの手紙や詩篇に当たり、ランボーの詩精神を辿り、ランボーがいかに市民革命期の時代の中で市民・労働者の立場に立ちつつも、自らを「内なる他者」を抱え込んだ真の詩人としての「見者」（ヴォワイアン）たらんと試行錯誤しながら生き抜いたかを冷静な筆致で検証している。そのランボーの内面の事実に肉薄して「ランボー追跡」の白熱した徹底性が、従来のランボー論にはない特長だと私は考えている。

第三章「パリ熱望と詩法確立」には、師イザンバールと詩人ドメニーに宛てた「見者の手紙」に分け入ってランボーの内面に肉迫しその詩法の秘密を明らかにしようとしている。第四章「二人の地獄めぐり」、第五章「二つの詩集

と詩の放棄」では、パリに出てヴェルレーヌとの出会い、また詩人としての成功と挫折を克明に描いている。そして第六章「その後のランボー」は、アルプス越えで詩を放棄し、オランダの植民地部隊に入隊し、ジャワ島で脱走。その後、職を求めてさまよいながら、最後はアラビア南端のアデンとアフリカのハラスで貿易の仕事をした。一八九一年に三十六歳で癌に罹り右脚を切断するが、その年の十一月フランスのマルセイユで三十七歳になったばかりで死亡してしまう。尾崎さんはランボーに熱狂することなく客観視しながら淡々と生涯を記述していく。そして読者に「内なる他者」を抱えて「見者」たらんとした一人の詩人の栄光と挫折と悲劇を等身大で差し出してくれている。この尾崎さんの労作『ランボー追跡』は、未知の領域に挑んだランボーという革命的な詩人像の長篇叙事詩を読んだような深い感動を読者にきっと与えるに違いない。

尾崎寿一郎評論集『ランボー追跡』栞解説文

鈴木比佐雄

コールサック社
2011